

立命館大学大学院言語教育情報研究科

言語情報コミュニケーションコース修了生インタビュー



2020年3月に立命館大学大学院言語教育情報研究科を修了し、2020年4月から京都大学大学院文学研究科言語学専修博士課程後期に在学中の徐敏徹さんに言語教育情報研究科に進学した経緯や今後の展望についてインタビューしました。

——言語教育情報研究科には言語教育学コースと言語情報コミュニケーションコースという2つのコースがあります。言語情報コミュニケーションコースを選んだ経緯を教えてください。

立命館大学文学部の3回生の時、卒論にコーパスを使いたいと思ったら、北出慶子先生から言語教育情報研究科の滝沢直宏先生に相談するとよいとアドバイスを受けて滝沢先生に相談に行きました。有田節子先生が開講していた日本語教授法で名古屋大学で開催された日本言語学会について紹介してくれて、学会に参加してみようという意欲をかき立てられました。文学部の4回生の時に早期履修で言語教育情報研究科の講義を受講し、そのまま入学試験を受験しました。言語情報コミュニケーションコースを選んだのは滝沢先生がいることが大きいですね。



——現在博士課程後期に在学していますが、進学することにしたきっかけは何ですか。

学部時代から言語の専門家になりたいと思っていました。専門家になるには博士号をとる必要があると思い、博士課程後期に進学しました。一貫制博士課程の研究科ではなく、修士課程のみの言語教育情報研究科に入学したのは、学部時代から指導を受けていた教員がいたためです。

——言語教育情報研究科で学んだことで、現在の自分の研究に役立っていることはありますか。

全部役立っているといえます。コーパスに関連する授業では、正規表現を使ってデータを分析する方法を学びました。今、動画から言語表現の用例やジェスチャーを検索する方法を模索していますが、そこで学んだ技術はこうした研究に役立っています。また、ジェンダーに関する社会言語学的な研究も計画しており、これには社会言語学関連の講義が役立っています。今いる研究科には様々な言語の専門家がいます。他の院生や先生方の研究発表を理解する上で言語教育情報研究科で学んだ言語類型論の知識が役立っています。

——言語教育情報研究科で学んだことが役に立っているようで、よかったです。今後の展望について聞かせて下さい。

言語研究のために「何をどのように使うと何ができるようになるか」ということを考えています。ウェブ上には数多くのツールがありますが、それらのほとんどは、言語研究を前提として作ったものではありません。こうしたツールを言語研究に活用することで、今までできなかったような言語研究ができないか、模索しています。『日本語文法』第21巻1号に「ウェブ検索による日本語研究の方法と可能性：用例検索のための検索演算子の活用」という論文を書きましたが、これもそのような方向性の研究の一つです。

——情報科学にも詳しい徐さんらしい方向性ですね。最後に、これから大学院はいることを検討している人たちへのアドバイスをお願いします。

学部で、つまり大学院に入る前に学会に一度参加することを勧めます。どんな人がどんな研究をしてどんな議論がなされているかわかります。それから、日本語を研究対象にするから日本語だけであればよいという考え方はしない方がよいと思います。研究情報の多くが英語で発信されているので、英語ができないと痛い目に遭います。あと、研究入門の類いを読むことを勧めます。お勧めは『理系のための研究生活ガイド：テーマの選び方から留学の手続きまで』（第2版、坪田一男（2010）講談社）と『文科系ストレイシープのための研究生活ガイド』（家入葉子（2005）ひつじ書房）です。